

が えん たたき起こされた臥煙

江戸時代の初期、江戸の町には消防組織はなかった。武家屋敷の火災は大名や旗本が、町屋の火災は町人が、それぞれ自己責任で消火活動をするというのが、幕府の方針であった。江戸城の火災には、老中・若年寄が旗本を指揮して消火にあたり、大火で人数が足りないときは、老中奉書（出場要請書）によって小大名の応援を求めた。

寛永6年(1629)年になると、幕府は、増上寺・湯島聖堂・寛永寺・米蔵・材木蔵など重要施設の消防にあたらせるために、大名火消を創設した。6万石以下のだ名10数家に、課役として1万石につき30人の消防要員を出させて消防隊を組織したのである。

明暦3年(1657)、江戸史上最大の大火が起こった。振袖火事として有名な明暦の大火で、本郷丸山の本妙寺から出火し、町屋、武家屋敷だけでなく、江戸城をも焼いたのである。この火事によって、これまでの大名火消程度では大火を防ぎきれないことを痛感した幕府は、大火の翌年、定火消の組織を創設した。

4人の旗本に火消屋敷(消防署)と火消卒を抱えるための役料300人扶持を支給し、専門の消防組織をつくったのである。その後、幾多の改変が行われ、火消屋敷や消防要員の数の増減があったが、宝永元年(1704)には火消屋敷数が10となり以後安定したため、定火消のことを「十人屋敷」あるいは「十人火消」と呼んだ。

享保3年(1718)になると、民間(町方)の自治消防組織として町火消の組織が確立した。

* * *

さて、右に掲げた絵は、定火消の火消卒の生活の一部を描いたものである。右上の絵柄は、丸太を枕に寝ている火消卒を不審番の者が大槌で丸太の端を一撃し、出火出場を知らせる風景、また左

下は、火消屋敷から出場する様子である。

この火消卒について、太田櫛朝は『江戸の華』で次のように述べている。

「火消卒をぐわえんといふ。即ち臥煙の音称なり。此のぐわえんといふもの、江戸者多し。極寒といへども邸の法被1枚の外衣類を用ひず。

消火に出る時は、満身の文身を現はし、白足袋はだし、身体は清く、男振美しく、髪の様法被の着こなし、意気にして勢よく、常に世間へは聊かの無理も通りければ、祁寒の苦を忘れて、身柄の家の子息等ぐわえんに身を誤るもの少しとせず。

此者共皆大部屋に一同起臥し、部屋頭の取締を受く。又義侠ありて、よく理非を弁ふ。火事なき時は三飯の外は吾身の掃除なり。夜中臥すに長き丸太を10人、15人一同に枕とす。櫓太鼓鳴るや枕木の小口を打ちて起こせば、直ちに飛出て火に赴くといふ。火中命を捨る者まありし……。」

当時、殉職者は四谷にあった臥煙寺に葬られたといわれているが、現在この寺の所在は不明である。

「臥煙」という言葉が、品性の卑しい無頼漢をさしている言葉として使われるようになった経緯は、上記の文中から察せられることと思う。

現在の消防職員は、夜間出場する場合、出場指令の放送を聞いて飛び起きるが、臥煙は、一列に並んで寝ている木枕の小口を、寝ずの番が木槌で叩き、その音と振動によって起こされた。「たたき起こす」の語源は、このあたりにあるのでは。

定火消は、明治元年5月19日、火災防御隊という名称に改められ、皇居の消防にあたることになったが、明治2年7月廃止された。

白井和雄／元消防博物館長

大槌一聲
睡眼を破るの図

大消屋敷に
於ては
準備の図



火消卒（臥煙）の生活「江戸火消絵巻」部分／東京消防庁蔵

火消卒

(いんげんの生活)

